

研究ノート

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に関する考察（その3） — 津城合戦（慶長5年8月）における吉川家の軍事力編成についての検討 —

白 峰 旬

【要 旨】

慶長5年（1600）8月、毛利家麾下の軍勢を中心として城攻めがおこなわれた伊勢国津城合戦の際に、吉川家中で手負い（負傷）、討死（戦死）した者の人名リストである「伊勢国津城合戦手負討死注文」（『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書）の内容を検討することにより、慶長5年8月の時点における吉川家の軍事力編成について考察する。

【キーワード】

伊勢国津城合戦、手負討死注文、岩国徴古館所蔵『雲州御時代御家人帳』、岩国徴古館所蔵『御家人帳』、岩国徴古館所蔵『広家公御時代御家人帳』

※拙稿「「伊勢国津城合戦手負討死注文」に関する考察（その2）－津城合戦（慶長5年8月）における吉川家の軍事力編成についての検討－」（『別府大学大学院紀要』20号、別府大学、2018年）より続く。

〔註〕

- (1) 「伊勢国津城合戦手負討死注文」（『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、東京帝国大学、1925年、728号文書）。
- (2) 『国史大辞典』9巻（吉川弘文館、1988年、558頁、「注文」の項、この項の執筆は高橋正彦氏）。
- (3) 『日本史大事典』4巻（平凡社、1993年、「注文」の項、この項の執筆は保立道久氏）。
- (4) 久留島典子「戦功の記録－中世から近世へ－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』182集、国立歴史民俗博物館、2014年）。
- (5) 光成準治編著『吉川広家』〈シリーズ・織豊大名の研究4〉（戎光祥出版、2016年）。
- (6) 岩国徴古館所蔵『雲州御時代御家人帳』（資料番号0502000094、安政6年〔1859〕写）。吉川広家が出雲国月山富田城の城主であった時代は天正19年（1591）～慶長5年（1600）の9年間である（児玉幸多監修・新田完三編『内閣文庫蔵諸侯年表』、東京堂出版、1984年、99頁）。
- (7) 岩国徴古館所蔵『御家人帳』（資料番号1118000079）。「分限帳b」は「分限帳a」と内容は近似しているので、「分限帳b」の記載内容は「分限帳a」と同じく天正19年～慶長5年に該当すると考えられる。「分限帳a」と比

較すると、「分限帳 b」は「分限帳 a」の最初の部分（六組の大組頭の名前と石高、十五組の御手廻組頭の名前について記された部分）が記載されていない一方で、「分限帳 a」の末尾以降で記載されていない部分が記載されている。また、「分限帳 a」と「分限帳 b」の同内容の該当箇所を比較すると一部の人名に相違がある。

- (8) 光成準治「軍事力編成からみた毛利氏の関ヶ原」（谷口央編『関ヶ原合戦の深層』、高志書院、2014年）では、「吉川広家勢」について、「しかしながら、安濃津城攻撃において、320名の討死・負傷者という多大な損害を蒙っており」（下線引用者）としているほか、同論文の表 2 において「吉川広家」の「安濃津討死・負傷」を「320」としているが、史料の表記によれば、これらの人数は320ではなく302が正しい。
- (9) 前掲・光成準治「軍事力編成からみた毛利氏の関ヶ原」における表 6「大坂残留兵力」。この表 6 によれば、堅田元慶の石高は1万4039石である。
- (10) 『日本国語大辞典（第二版）』9巻（小学館、2001年、716～717頁）。
- (11) 『藩史大事典』6巻（雄山閣出版、1990年、329頁、岩国藩の項）。この記載箇所の出典は『岩国市史』上（岩国市役所、1970年、546頁）である。
- (12) 前掲『藩史大事典』6巻（329頁）。前掲『岩国市史』上（546頁）。
- (13) 『岩国市史』通史編 2（近世）（岩国市、2014年、323～324、329、331頁）では、①大組は大番組の略称であろう、②大組は番方の中核を担った、③岩国入封前の家臣団の戦力の中心は大番組（引用者注：大組を指す）（6組415人）、御手廻衆（御馬廻衆、131人）、御手廻組（15組、593人）、御鉄砲衆（800人）であった、と指摘されている。また、前掲『岩国市史』通史編 2（近世）（331頁）では、御手廻組について藩主側近の役方の組としているので、江戸時代になって戦乱が終わると、番方から役方に性格を変えていった、と考えられる。
- (14) 前掲『内閣文庫蔵諸侯年表』（99頁）には、天正19年3月に吉川広家は豊臣秀吉から伯耆国七郡内において11万石と隠岐国を合わせて与えられ、富田の月山城に住す、としている。
- (15) 前掲『藩史大事典』6巻（329頁）。前掲『岩国市史』上（547頁）。
- (16) 岩国徴古館所蔵『広家公御時代御家人帳』（資料番号1118000244、寛政10年〔1798〕写）。この吉川家の「分限帳 c」の成立年代については、「分限帳 c」において「彦次郎様」が3000石と記載されている点をもとに考えると次のようになる。「彦次郎様」とは吉川広家の次男（三男とする説もある）・吉川彦次郎である。吉川彦次郎は慶長12年（1607）に生まれ、同17年（1612）（6歳）に吉見家を家督相続して吉見政春になり、その後、寛永14年（1637）（31歳）に毛利就頼なりよりになり大野毛利家を創始した。吉川彦次郎が3000石であった期間は、元和4年10月12日に兄の吉川広正から3000石を分与された時から、寛永3年（1626）に兄の吉川広正からさらに2000石を分与されるまでの期間になる（『一門六家 大野毛利氏と平生開作』、平生町教育委員会、1988年）。よって、岩国徴古館所蔵『広家公御時代御家人帳』の成立年代はその期間になる。ただし、吉川広家の没年は寛永2年であるので、『広家公御時代御家人帳』（下線引用者）という名前を考慮すると、上記の期間において寛永3年は除外してもよいと思われる。
- ※『一門六家 大野毛利氏と平生開作』（平生町教育委員会、1988年）の存在については、吉川史料館学芸員の原田史子氏より御教示を得た。記して感謝する次第である。
- (17) Iの「彦次郎様組」の合計石高は4962石である。このIの「彦次郎様組」の合計石高は、A～Iの組の中で最も

石高が高いが、その理由は、吉川彦次郎（「彦次郎様」）の石高が3000石であり、このように吉川彦次郎の石高が高いことによるものである。

- (18) 前掲『岩国市史』通史編2（近世）（323頁）。
- (19) 前掲『岩国市史』通史編2（近世）（334頁）。
- (20) 前掲『岩国市史』上（545～547頁）。
- (21) 近藤好和『武器の日本史』（平凡社、2010年、123頁）では弓胎弓は近世の弓である、と指摘されている。
- (22) 戸部民夫『図解「武器」の日本史－その知られざる威力と形状－』（KKベストセラーズ、2006年、133頁）。
- (23) 前掲・戸部民夫『図解「武器」の日本史－その知られざる威力と形状－』（152頁）。
- (24) なお、前掲・近藤好和『武器の日本史』（69頁）では「弓箭は鉄炮よりも射程距離が短いために、両軍がより接近した時に行われた」と指摘されている。
- (25) 鈴木真哉『「戦報報告書」が語る日本中世の戦場－鎌倉最末期から江戸初期まで－』（洋泉社、2015年、59～61頁）。以下、本書のサブタイトルについては省略する。
- (26) 鈴木真哉氏による分析結果の％については、小数点第2位まで算出しているが、本稿での計算に際しては、それぞれ小数点第2位を四捨五入して計算した。
- (27) 「分限帳a」では今田隼人について、1500石と記している箇所と1900石と記している箇所がある。
- (28) 平井上総『兵農分離はあったのか』（平凡社、2017年、47頁）では「兵という言葉、純粋な戦闘員という意味で厳密に用いるのであれば、士分と上層奉公人がそれにあたる。そして、中間以下の下層奉公人は、兵から排除されることになろう。」と指摘されている。
- (29) 盛本昌広『戦国合戦の舞台裏－兵士たちの出陣から退陣まで－』（洋泉社、2010年、39頁）では、中間は合戦の際には戦闘員の一角をなしていた、と指摘されている。このように、中間を戦闘員とする見解もある。
- (30) この記載箇所の上方の余白の部分には、小さい字でさらに11名の名前の記載があるが、異筆であるので後世の書き込みと考えられる。この11名のうち3名は名前が記載された上から線を引いて抹消されている。
- (31) 表1の【B】の部分において「津城討死の1人」（分限帳b）と記された熊野兵庫助など22名。
- (32) 表1の【A】の部分において「津城討死の1人」（分限帳b）と記された二宮六右衛門など7名。
- (33) この指摘は、光成準治「吉川広家をめぐる三つの転機」（前掲・光成準治編著『吉川広家』、28～29頁）による。
- (34) 津城合戦で吉川広家が家臣に対して出した感状については、本稿の補論②を参照されたい。
- (35) 拙稿「『伊勢国津城合戦頭注文』及び『尾張国野間内海合戦頭注文』に関する考察（その1）－津城合戦（慶長5年8月）における毛利家の軍事力編成についての検討－」（『別府大学紀要』59号、別府大学、2018年）、「同（その2）」（『別府大学大学院紀要』20号、別府大学、2018年）、「同（その3）」（『史学論叢』48号、別府大学史学研究会、2018年）。
- (36) 「8月4日付今田経忠・大信・桂春房・祖式長好・井上春実・有少宛吉川広家自筆書状」（『吉川家文書・別集』（大日本古文書）、東京帝国大学、1931年、631号文書）。
- (37) 「7月10日付祖式長好宛吉川広家自筆書状」（前掲『吉川家文書・別集』、625号文書）。
- (38) 「慶長5年7月7日付吉川広家自筆普請法度」（前掲『吉川家文書・別集』、707号文書）。

- (39) 「7月29日付祖式長好宛吉川広家書状」(前掲『吉川家文書・別集』、630号文書)。
- (40) 「9月12日付祖式長好宛吉川広家書状」(前掲『吉川家文書・別集』、609号文書)。
- (41) 前掲「7月10日付祖式長好宛吉川広家自筆書状」。
- (42) 前掲「慶長5年7月7日付吉川広家自筆普請法度」。
- (43) 「9月12日付祖式長好・佐九(=佐々木九兵衛カ)宛吉川広家自筆書状」(前掲『吉川家文書・別集』、632号文書)。
- (44) この書状では、この方面には敵が3万ばかりで陣取りをしているが、味方の人数ははるかに多い、としているが、この場合の3万というのは大垣城に籠城していた石田三成方の軍勢人数を指すことは明らかなので(拙稿「通説打破!関ヶ原合戦の真実“天下分け目の戦い”はこう推移した」、『歴史群像』通巻145号、2017年10月号、株式会社学研プラス、2017年9月発売)、敵=石田三成方の軍勢、味方=徳川家康方の軍勢ということになり、この時点で吉川広家は家康方に寝返っていたことを示している。前掲「9月12日付祖式長好宛吉川広家書状」では、敵は垂井・赤坂に在陣している、としているので、この場合は敵=徳川家康方の軍勢であるので、同日付であってもこの書状では他言を禁じていない。つまり、9月12日時点における吉川広家から見た敵・味方の位置付けに関して、前掲「9月12日付祖式長好・佐九(=佐々木九兵衛カ)宛吉川広家自筆書状」の内容が吉川広家から見た本当(本心)の位置付けであり、前掲「9月12日付祖式長好宛吉川広家書状」の内容は吉川広家の本心とは異なる表面上(建前上)の位置付けということになる。
- (45) 『山口県史』史料編、中世2(山口県、2001年、138頁)。
- (46) 前掲『山口県史』史料編、中世2(138頁)。
- (47) 前掲『吉川家文書・別集』(315号文書)。
- (48) 前掲『吉川家文書・別集』における「附録 石見吉川家文書」(158号文書)。
- (49) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980年、558頁、「サキガケ(先駆)」の項)。
- (50) 今田平右衛門は「分限帳a」では700石で御手廻組の組頭である。
- (51) 桂左馬助は「分限帳a」に名前記載はない。
- (52) 前掲『吉川家文書・別集』における「附録 石見吉川家文書」(159号文書)。
- (53) 『日本国語大辞典(第二版)』3巻(小学館、2001年、361頁)では「懸口・掛口(かかりくち)」の意味として「合戦の際、味方が攻撃をしかけようとする時期。また、その攻撃をしかける敵陣の場所。」としている。よって、この場合は、攻め口という意味にとらえてよからう。
- (54) 『日本国語大辞典(第二版)』6巻(小学館、2001年、1108頁)では「尺木(しゃくぼく)」の意味として「短い木片。建築や陣の柵などに用いる材木。」としている。
- (55) 南部弥兵衛は「分限帳a」では10石で吉川勘左衛門の大組に属する。
- (56) 細矢射延之助は「分限帳a」では40石で吉川勘左衛門の大組に属する。
- (57) 「手前」には「自分」、「わたくし」という意味がある(前掲『日本国語大辞典(第二版)』9巻、711頁、「手前(てまえ)」の項)。
- (58) 安本藤兵衛は「分限帳a」に名前記載はない。

- (59) 朝枝宗太夫は「分限帳 a」では250石で吉川勘左衛門の大組に属する。
- (60) 阿野藤左衛門は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (61) 中畑源太兵衛は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (62) 佐伯彦一は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (63) 前掲『邦訳日葡辞書』（469頁）では、「ノボリ（幟）」の意味として「戦争の時に、兵士が携行する旗」としている。
- (64) 前掲『邦訳日葡辞書』（211頁）では、「旗を挿す」の意味として「旗を腰にさして携行する」としている。よって、この場合は、幟を腰にさして、津城の塀を登って一番に城内へ入った、という意味になる。
- (65) 岡本弥三は「分限帳 a」では10石で吉川勘左衛門の大組に属する。
- (66) 粟屋市左は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (67) 山縣兵右衛門尉は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (68) 前原備前は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (69) 富屋助内は「分限帳 a」では20石で御手廻衆である。
- (70) 前掲『邦訳日葡辞書』（419頁）では「モングチ（門口）」の意味として「門の入口」としている。
- (71) 内藤平左衛門は「分限帳 a」では200石で吉川勘左衛門の大組に属する。
- (72) 二宮平左衛門は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (73) 井上清三は「分限帳 a」に名前の記載はない。
- (74) 「慶長5年9月23日付垣田勘左衛門宛毛利秀元感状写」（『山口県史』史料編、中世3、山口県、2004年、203頁）。
- (75) 「吉川経実家来手負戦死人名影写」（前掲『吉川家文書・別集』における「附録 石見吉川家文書」、160号文書）。
- (76) 「吉川広家功臣人数帳」（『吉川家文書之二』〈大日本古文書〉、東京帝国大学、1926年、における「追加」の2号文書）。
- (77) 「（慶長5年）12月1日付吉川経安宛吉川広家書状写」（前掲『吉川家文書・別集』における「附録 石見吉川家文書」、100号文書）。
- (78) 「（慶長5年）12月16日付二宮俊実宛吉川広家自筆書状」（前掲『吉川家文書・別集』、394号文書）。

【付記】岩国徴古館では、同館所蔵の『雲州御時代御家人帳』、『御家人帳』、『広家公御時代御家人帳』などの史料閲覧、及び、写真撮影に際して、御高配に預かった。記して感謝する次第である。

表 1

「伊勢国津城合戦手負討死注文」

(『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書)

【A】津城において、8月24日、二ケ度 (=二度) 合戦の時、吉川手 (=吉川広家の軍勢) の手負の覚

名 前	被疵の種類	分限帳の記載
×宮庄藤五郎 ^(注1)	鉄放(鉄炮)疵1ヶ所	
○今田隼人	やり(疵)1ヶ所 鉄炮(疵)1ヶ所	Bの今田隼人の組の大組頭、1500石、或いは、1900石(分限帳a)
○吉川勘左衛門尉 ^(注2)	やり(疵)2ヶ所 鉄炮(疵)2ヶ所 矢(疵)1ヶ所	Cの吉川勘左衛門の組の大組頭、2200石(分限帳a)
○香川又左衛門尉 ^(注3)	やり疵1ヶ所	Dの香川又左衛門の組の大組頭、1500石(分限帳a)
○今田安右衛門尉	やり(疵)1ヶ所 鉄炮(疵)1ヶ所	御手廻衆、500石(分限帳a)
○二宮兵介	やり疵2ヶ所	3の御手廻組頭、御手廻衆、400石(分限帳a)
○同六右衛門尉	鉄炮疵1ヶ所	御手廻衆、200石(分限帳a) 津城討死の1人(分限帳b)
○松浦三介	鉄炮疵1ヶ所	御手廻衆、200石(分限帳a)
△山縣清右衛門尉	鉄炮疵1ヶ所	山縣清左衛門(分限帳a) 御手廻衆、400石(分限帳a)
○森脇志摩守	やり疵1ヶ所	森脇志摩(分限帳a) 6の御手廻組頭(分限帳a)
○境忠六	やり疵1	御手廻衆、200石(分限帳a)
×杉岡一右衛門尉	鉄炮疵1	
△小寺少五郎	矢疵1	小寺正五郎(分限帳a) 御手廻衆、100石(分限帳a)
○桂五郎兵衛	やり疵1	Eの桂左近の組、200石(分限帳a)
○同六郎右衛門尉	鉄炮疵1	Eの桂左近の組、450石(分限帳a)
○山田三郎左衛門尉	鉄炮疵1	Aの宮庄太郎左衛門の組、300石(分限帳a)
○丹比七郎兵衛	やり(疵)1	Dの香川又左衛門の組、120石(分限帳a)
○米原与一兵衛	やり(疵)1	Dの香川又左衛門の組、130石(分限帳a) 津城討死の1人(分限帳b)
△岡田五郎衛門尉	鉄炮(疵)1	岡田五郎右衛門、岡田五郎左衛門(分限帳a) 9の御手廻組頭、御手廻衆、300石(分限帳a)
×筏源介	やり(疵)1	
×同源四郎	鉄炮(疵)1	
×同勘允	鉄炮(疵)1	
×同善吉	矢(疵)2	
○粟屋九郎衛門尉	やり(疵)1	粟屋九郎右衛門(分限帳a) Cの吉川勘左衛門の組、150石(分限帳a)
×香川勘七	やり(疵)1	
○森脇彦左衛門尉	やり(疵)2 鉄炮(疵)1	Dの香川又左衛門の組、20石(分限帳a) 津城討死の1人(分限帳b)
×安村彦介	鉄炮(疵)1	

×安達治兵衛	やり（疵）1 矢（疵）2	
△堀越新右衛門尉	鉄炮（疵）1	城越新右衛門（分限帳 a） 11の今田平右衛門の組、10石（分限帳 a）
○森脇彌兵衛	やり（疵）1	森脇弥兵衛（分限帳 a） 11の今田平右衛門の組、10石（分限帳 a）
×境次郎左衛門尉	やり（疵）1	
×同孫六	鉄炮（疵）1	
○山縣源右衛門尉	鉄炮（疵）1	Dの香川又左衛門の組、150石（分限帳 a）
△尾越太郎右衛門尉	やり（疵）2	尾越太兵衛（分限帳 a） 御手廻衆、60石（分限帳 a）
×綿貫新五郎	やり（疵）1	
○黒政五右衛門尉	やり（疵）1 矢（疵）1	Eの桂左近の組、60石（分限帳 a）
○小野藤兵衛	矢（疵）1	津城討死の1人（分限帳 b）
○井上藤右衛門尉	鉄炮（疵）1	Eの桂左近の組、60石（分限帳 a）
×村田二左衛門尉	鉄炮（疵）1	
○長又兵衛	鉄炮（疵）1	Eの桂左近の組、20石（分限帳 a）
×笠井作允	鉄炮（疵）1	
×小屋彌左衛門尉	矢（疵）1	
△境助兵衛	鉄炮（疵）2	境助左衛門（分限帳 a） 8の有福新兵衛の組、10石（分限帳 a）
△森脇左衛門進 ⁽³⁴⁾	やり（疵）1	森脇右衛門尉（分限帳 a） Aの宮庄太郎左衛門の組、100石（分限帳 a）
×小河内与三	鉄炮（疵）1	
×東孫市	鉄炮（疵）1	
×河野源右衛門尉	鉄炮（疵）1	
×森脇兵衛門尉	鉄炮（疵）1	
×森脇忠右衛門尉	やり（疵）1	
×山田与作	鉄炮（疵）1	
○森脇三郎兵衛	鉄炮（疵）1	Aの宮庄太郎左衛門の組、250石（分限帳 a）
○同彌四郎	やり（疵）1	森脇弥四郎（分限帳 a） Aの宮庄太郎左衛門の組、20石（分限帳 a）
○松井出左衛門尉	やり（疵）2 矢（疵）1	松井出左衛門（分限帳 a） 御手廻衆、40石（分限帳 a）
△下善左衛門尉	鉄炮（疵）1	山下善左衛門（分限帳 b） 津城討死の1人（分限帳 b）
○石川与兵衛	鉄炮（疵）1	6の森脇志磨の組、100石（分限帳 a）
△森脇五郎衛門尉	鉄炮（疵）1	森脇五郎右衛門（分限帳 a） 6の森脇志磨の組、30石（分限帳 a）
△中井平三	やり（疵）1 矢（疵）1	中井平蔵（分限帳 a） 2の祖式九左衛門の組、20石（分限帳 a）
○湯浅彌三郎	鉄炮（疵）1	湯浅弥三郎（分限帳 a） 3の二宮兵介の組、10石（分限帳 a）
△田中喜右衛門尉	鉄炮（疵）1	田中喜左衛門（分限帳 a） 3の二宮兵介の組、10石（分限帳 a）
×高橋伊左衛門尉	鉄炮（疵）1	
×青砥九兵衛	鉄炮（疵）1	
×岩田与三	矢（疵）1	

△河上理兵衛	やり (疵) 1	河上利兵衛 (分限帳 a) 3 の二宮兵介の組、20石 (分限帳 a)
×福原理介	やり (疵) 1	
×近藤作兵衛	矢 (疵) 1	
×竹内右兵衛	やり (疵) 1	
×忠田神左衛門尉	矢 (疵) 1	
×別所小作	矢 (疵) 1	
×御調九兵衛	鉄炮 (疵) 2	
×西村与右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
○朝枝右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	1 の松岡安右衛門の組、20石 (分限帳 a)
○福原源兵衛	やり (疵) 1	1 の松岡安右衛門の組、15石 (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
△足達長太夫	やり (疵) 1	足立長太夫 (分限帳 a) 御手廻衆、60石 (分限帳 a)
×中村五右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
△村上孫三	鉄炮 (疵) 1	村上孫宗 (分限帳 a) 御手廻衆、60石 (分限帳 a)
×池尻新右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
×東彌右衛門尉	やり (疵) 1	
×石原少左衛門尉	やり (疵) 1	
○石川徳郎右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	御手廻衆、60石 (分限帳 a)
○和田彌介	やり (疵) 1	和田弥介 (分限帳 a) 1 の松岡安右衛門の組、20石 (分限帳 a)
×長屋吉右衛門尉	鉄放 (鉄炮) (疵) 1	
○谷守吉蔵	鉄炮 (疵) 1	1 の松岡安右衛門の組、30石 (分限帳 a)
×若宮久介	鉄炮 (疵) 1	
△前原木工允	やり (疵) 1	前原 李 之助 (分限帳 a) 7 の米原肥前の組、90石 (分限帳 a)
△森口作内	鉄炮 (疵) 1 やり (疵) 1	森脇作内 (分限帳 a) 御手廻衆、100石 (分限帳 a)
△□梨兵左衛門尉	鉄炮 (疵) 4ヶ所	木梨兵左衛門 御手廻衆、60石 (分限帳 a)
△畑兵右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	畠久右衛門 (分限帳 a) 11 の今田平右衛門の組、10石 (分限帳 a)
×綿貫新九郎	矢 (疵) 1	
△大森何介	やり (疵) 1	大守何介 (分限帳 a) 9 の岡田五郎右衛門の組、60石 (分限帳 a)
×井上市介 (注4)	やり (疵) 1	
×安江与五郎	鉄炮 (疵) 1	
○多賀与兵衛	鉄炮 (疵) 1	9 の岡田五郎右衛門の組、10石 (分限帳 a)
△佐々間理介	やり (疵) 1 矢 (疵) 1	佐々間利 ^(マ) (分限帳 a)。佐々間利介 (分限帳 b) 9 の岡田五郎右衛門の組、12石 (分限帳 a)
○谷口藤兵衛	矢 (疵) 1	注冊藤兵衛 (分限帳 a) 谷口 9 の岡田五郎右衛門の組、10石 (分限帳 a)
×末長久二	鉄炮 (疵) 1	
△静間源五郎	鉄炮 (疵) 1	静間源四郎 (分限帳 a) 2 の祖式九左衛門の組、15石 (分限帳 a)
×相見忠右衛門尉	やり (疵) 1	

×水落四郎二郎	鉄炮（疵） 1	
×三嶋新五郎	鉄炮（疵） 1	
×中村与三	鉄炮（疵） 1	
×黒政角介	鉄炮（疵） 1	
△河邊半右衛門尉	鉄炮（疵） 1	河上半右衛門（分限帳 a） 伏見大坂（分限帳 a）
×原田二右衛門尉	鉄炮（疵） 1	
×中原一大夫	鉄炮（疵） 1	
×山崎与兵衛	やり（疵） 1	
×有田又兵衛	鉄炮（疵） 1	
○東源兵衛	やり（疵） 1	Dの香川又左衛門の組、60石（分限帳 a）
△目賀田弾右衛門尉	鉄炮（疵） 2	目加田弾右衛門（分限帳 a） Dの香川又左衛門の組、60石（分限帳 a）
△同五右衛門尉	鉄炮（疵） 1	目加田治兵衛（分限帳 a） Dの香川又左衛門の組、60石（分限帳 a）
×静間又三	鉄放（鉄炮）（疵） 1	
×粟屋孫兵衛	やり（疵） 1	
×土居少右衛門尉	鉄炮（疵） 1	
×三浦理右衛門尉	鉄炮（疵） 1	
○松田半内	鉄炮（疵） 1	Dの香川又左衛門の組、10石（分限帳 a）
○佐武善左衛門尉	鉄炮（疵） 1	Fの粟屋彦右衛門の組、60石（分限帳 a）
○森脇彌右衛門尉	鉄放（鉄炮）（疵） 1	森脇弥右衛門（分限帳 a） Fの粟屋彦右衛門の組、100石（分限帳 a）
○塩冶新允 ^{（注5）}	鉄炮（疵） 1	塩冶新之允 Fの粟屋彦右衛門の組、60石（分限帳 a）
△近藤理兵衛	矢（疵） 1	近藤利兵衛 Fの粟屋彦右衛門の組、60石（分限帳 a）
○後藤太兵衛	やり（疵） 2	Fの粟屋彦右衛門の組、20石（分限帳 a）
△鳥飼七右衛門尉	鉄炮（疵） 1	鳥羽七右衛門（分限帳 a） Fの粟屋彦右衛門の組、15石（分限帳 a）
△長和宗左衛門尉	鉄炮（疵） 1	長和与三左衛門 Eの桂左近の組、50石カ（分限帳 a）
×内田太郎左衛門尉	鉄炮（疵） 1	
×森脇孫十郎	鉄炮（疵） 1	
△葛尾一郎衛門尉	鉄炮（疵） 1	葛尾市郎左衛門（分限帳 a） Fの粟屋彦右衛門の組、10石（分限帳 a）
△長和与市	鉄炮（疵） 1	長和与三（分限帳 a） Fの粟屋彦右衛門の組、10石（分限帳 a）
○中村又兵衛	やり（疵） 1	Cの吉川勘左衛門の組、100石（分限帳 a）
×大塚与二右衛門尉	やり（疵） 1	
△青砥自然	鉄炮（疵） 1	青砥自然（分限帳 a） Cの吉川勘左衛門の組、40石（分限帳 a）
△花■神介	鉄炮（疵） 1	①花安甚介（分限帳 a） Cの吉川勘左衛門の組、60石（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b） ②花原利介（分限帳 a） 6の森脇志磨の組、10石（分限帳 a）
△江田孫七郎	鉄炮（疵） 1	江田孫三郎 9の岡田五郎右衛門の組、10石（分限帳 a）

×大草藤右衛門尉	やり (疵) 1	
×村田小右衛門尉	やり (疵) 1	
○境七郎右衛門尉	やり (疵) 2	Bの今田隼人の組、150石 (分限帳 a)
△三須左馬允	やり (疵) 1	三次左馬允 (分限帳 a) Bの今田隼人の組、60石 (分限帳 a)
×桑原二介	やり (疵) 1	
△森脇四郎二郎	やり (疵) 1	森脇四郎三郎 (分限帳 a) Bの今田隼人の組、20石 (分限帳 a)
×生田宗三郎	鉄炮 (疵) 1	
×山縣与次	矢 (疵) 1	
○内藤三郎左衛門尉	鉄炮 (疵) 1	Bの今田隼人の組、石高記載なし (分限帳 a)
×内田源四郎	鉄炮 (疵) 2	
△末田彌六	鉄炮 (疵) 1	末田弥吉 (分限帳 a) 御裏様衆 (分限帳 a)
×河上二介	鉄炮 (疵) 1	
×湯浅四兵衛	鉄炮 (疵) (注6)	
×森脇七介	矢 (疵) 1	
×高橋治右衛門尉	矢 (疵) 1	
以上145人		
中間の手負		
×正右衛門尉	鉄放 (鉄炮) (疵) 1	
×源兵衛	同	
×与三兵衛	同	
×小十郎	鉄炮 (疵) 2	
×平左衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
×二郎右衛門尉	やり (疵) 1	
×五郎右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
×又右衛門尉	矢 (疵) 1	
○四郎兵衛	鉄炮 (疵) 1	同 (西之丸様) 御小人者、石高記載なし (分限帳 a)
×宗二郎	鉄炮 (疵) 1	
×太郎右衛門尉	同	
×与二郎	同	
×九郎兵衛	同	
×助兵衛	同	
×久左衛門尉	矢 (疵) 1	
×六■衛門尉	やり (疵) 1	
以上16人		
合 (計) 161人		

【B】同討死した者の覚

×吉川采 (采カ) 女允		
×下江新允		
○前原孫兵衛		御手廻衆、200石 (分限帳 a)
×野上市兵衛		
○熊野兵庫助		熊野兵庫 (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
△安倍太郎右衛門尉		阿部六右衛門 (分限帳 a) 御手廻衆、40石 (分限帳 a)

○中原作兵衛		Dの香川又左衛門の組、30石（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b）
×綿貫作左衛門尉		
×多嶋次郎右衛門尉		
×廣瀬九右衛門尉		
×福富又右衛門尉		
×河上二右衛門尉		
×福原七郎兵衛		
×秋里次郎兵衛		
○下二介		下仁介（分限帳 a） Aの宮庄太郎左衛門の組、60石（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b）
○井下新兵衛		井下 ^(ツマ) 新兵衛（分限帳 a） Fの粟屋彦右衛門の組、150石（分限帳 a） 「津の城打死」と記されている（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b）
○同又七		津城討死の1人（分限帳 b）
○朝枝又六		津城討死の1人（分限帳 b）
×横四兵衛		
○利松与次		津城討死の1人（分限帳 b）
○佐伯彌三		佐伯弥三（分限帳 a） 御手廻衆、20石（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b）
○河村主馬		河村主馬之允 11の今田平右衛門の組、10石（分限帳 a）
×浅原藤兵衛		
○田坂二右衛門尉		田坂仁右衛門（分限帳 a） 9の岡田五郎右衛門の組、10石（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b）
△山縣彌二郎		山縣弥五郎（分限帳 b） 二郎カ 津城討死の1人（分限帳 b）
○栗栖四兵衛		津城討死の1人（分限帳 b）
×松浦五右衛門尉		
○井下三右衛門尉		Fの粟屋彦右衛門の組、60石（分限帳 a） 「津の城打死」と記されている（分限帳 a）
○二山源五郎		Eの桂左近の組、30石（分限帳 a） 「津の城打死」と記されている（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b）
△森田宗十郎		森田惣十郎（分限帳 b） 津城討死の1人（分限帳 b）
○服部治兵衛		御手廻衆、40石（分限帳 a） 「津の城打死」と記されている（分限帳 a）
×牛尾助右衛門尉		
×三浦作右衛門尉		
○山縣七左衛門尉		津城討死の1人（分限帳 b）
×中田助二郎		
△上村理左衛門尉		上村利右衛門（分限帳 a） 7の米原肥前の組、15石（分限帳 a）

×田中彌三		
○原田九兵衛		Bの今田隼人の組、60石 (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
○井上宗右衛門尉		Aの宮庄太郎左衛門の組、60石 (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
○服部少三郎		Eの桂左近の組、60石 (分限帳 a) 「津の城打死」と記されている (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
△石川新三		石川新蔵 (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
○品川助兵衛		御手廻衆、30石 (分限帳 a)
×畑野彌兵衛		
×恩田彌太郎		
○小寺清七		Cの吉川勘左衛門の組、60石 (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
×雑賀与右衛門尉		
×大森孫二郎		
○森脇源四郎		Eの桂左近の組、10石 (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
×内藤治兵衛		
○井下三右衛門尉 ^(注7)		Fの粟屋彦右衛門の組、60石 (分限帳 a) 「津の城打死」と記されている (分限帳 a)
△賀藤少右衛門尉		加藤少右衛門 (分限帳 b) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
○白石九郎右衛門尉		Fの粟屋彦右衛門の組、30石 (分限帳 a) 「津の城打死」と記されている (分限帳 a) 津城討死の 1 人 (分限帳 b)
	×中間 彌二郎	
	×同 二郎四郎	
	以上 ⁽⁷⁷⁾ 54人 (53人カ)	
<p>(以下、〔吉川〕広家〔の〕自筆) 右の手負・死人は書き付け申し上げた通り、一人も偽りが無い。もし、偽りにおいては、愛宕⁽⁷⁷⁾(岩)(山)、 巖嶋大明神、大社大明神、摩利支尊天、八幡大菩薩、天満大自在天神の日本の諸神の御爵を罷り蒙るべきものなり。</p> <p style="text-align: right;">吉(川)蔵(人) 廣家(花押)</p> <p style="text-align: center;">8月26日 堅兵 (= 堅田元慶) 御申</p>		

【凡例】

分限帳 a …岩国徴古館所蔵『雲州御時代御家人帳』(資料番号0502000094)

分限帳 b …岩国徴古館所蔵『御家人帳』(資料番号1118000079)

○…分限帳 a、或いは、分限帳 b に名前の記載があるもの

×…分限帳 a、或いは、分限帳 b に名前の記載がないもの

△…分限帳 a、或いは、分限帳 b に近似する名前の記載があるもの

※史料中の文については、適宜、筆者(白峰)が現代語訳をおこなった。

※表 1 における「分限帳の記載」の項目は、表 1 の作成にあたり補足した箇所である。表 1 における「名前」の項目の名前との字の違いについては下線を引いた。

※分限帳 b は津城討死の衆の記載についてのみ対象にした。ただし、その記載箇所以外でも、名前を分限帳 a と比較して表 1 において提示したケースもある。

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」(『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書)では、①「鉄放」と「鉄炮」を書き分けている、②「鉄放」、「鉄炮」、「矢」は漢字で記載されているが、「やり」はひらがなで記載されている、という点が指摘できるが、その理由については今後の検討課題である。

- (注1) 宮庄藤五郎に対しては吉川広家から感状が出された。詳しくは本稿の補論②を参照。
- (注2) 吉川勘左衛門尉に対しては吉川広家から感状が出された。詳しくは本稿の補論②を参照。
- (注3) 香川又左衛門尉に対しては吉川広家から感状が出された。詳しくは本稿の補論②を参照。
- (注4) 山口県文書館所蔵『広島御時代分限帳』（請求番号52給禄2（2の1））には170石として載っている。『広島御時代分限帳』は山口県文書館のウェブサイト（<http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/>）で閲覧できる。
- (注5) 「塩」は「塩」の異体字である。
- (注6) 被疵が何箇所か、が記されていないのは記載漏れと思われる。
- (注7) 井下三右衛門尉は上記に既出なので、同一人物名が史料上は重複していることになる。よって、合計人数も1人減ることになる。

表 2

「伊勢国津城合戦手負討死注文」

(『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書)

【C】

名 前	被疵の種類	分限帳の記載
○今田内 (の) 手負		今田 = 今田隼人、或いは、今田平右衛門 ①今田隼人…Bの今田隼人の組の大組頭、1500石、或いは、1900石 (分限帳 a) ②今田平右衛門…11の今田平右衛門組 (御手廻組) の組頭、御手廻衆、700石 (分限帳 a)
×三吉茂右衛門尉	矢 (疵) 1	
×寺本三次兵衛	鉄炮 (疵) 1	
×嶋岡長右衛門尉	刀疵 1	
×中原孫左衛門尉	矢 (疵) 1	
×安原作兵衛	やり (疵) 1	
×井頭六右衛門尉	やり (疵) 1	
×原宗右衛門尉	矢 (疵) 1	
×朝枝藤三	鉄炮 (疵) 2	
×市三	鉄放 (鉄炮) (疵) 1	
×太郎右衛門尉	矢 (疵) 1	
×与九郎	鉄放 (鉄炮) (疵) 1	
○六右衛門尉	鉄放 (鉄炮) (疵) 1	六右衛門 (分限帳 a) 御小人衆、13石 (分限帳 a)
×久四郎	鉄炮 (疵) 1	
×作兵衛	鉄炮 (疵) 1	
同討死者		
×山縣忠右衛門尉		
×吉岡角右衛門尉		
×三吉久右衛門尉		
×岡村宗介		
×林助兵衛		
○小三郎		同 (西之丸様) 御小人者、石高記載なし (分限帳 a)
×新介		
×助六		
○吉勘左内 (の) 手負		吉勘左 = 吉川勘左衛門 吉川勘左衛門…Cの吉川勘左衛門の組の大組頭、2200石 (分限帳 a)
×福光忠三郎	鉄炮 (疵) 1	
×山中長右衛門尉	やり (疵) 1	
×會所左兵衛	やり (疵) 2 鉄放 (鉄炮) (疵) 1	
×津森半右衛門尉	やり (疵) 1 鉄炮 (疵) 1	
×河崎又二郎	やり (疵) 1	
×森脇又四郎	鉄放 (鉄炮) (疵) 2	
×彌左衛門尉	鉄炮 (疵) 1	

同討死者		
×三嶋作右衛門尉		
×小坂喜三郎		
×又介		
△桂右近内（の）手負		桂右近は分限帳 a の桂左近と同一人物と考えられる桂左近…Eの桂左近の組の大組頭、900石（分限帳 a）
×野崎新允	やり（疵）1 矢（疵）1	
×安田彌左衛門尉	やり（疵）1	
×福田治兵衛	鉄炮（疵）1	
×神左衛門	鉄放（鉄炮）（疵）1	
×長右衛門	やり（疵）1	
×宗四郎	やり（疵）1	
×三郎五郎	鉄炮（疵）1	
×小二郎	鉄炮（疵）1	
同討死者		
×助七		
×新吉		
○香川又左内（の）手負		香川又左 = 香川又左衛門 香川又左衛門…Dの香川又左衛門の組の大組頭、1500石（分限帳 a）
×恩田又右衛門尉	やり（疵）1 矢（疵）2	
×三宅源允	やり（疵）1	
×江戸吉右衛門尉	やり（疵）1 矢（疵）2	
×塚脇七右衛門尉	鉄炮（疵）1	
×栗栖十兵衛	鉄炮（疵）1	
×内藤又左衛門尉	矢（疵）1	
×本根与十郎	鉄炮（疵）1	
×春喜介	鉄炮（疵）1	
×井頭彌二郎	鉄放（鉄炮）（疵）1	
×助兵衛	鉄炮（疵）1	
×小左衛門	鉄炮（疵）1	
×二郎五郎	鉄炮（疵）1	
×小七	鉄放（鉄炮）（疵）1	
×彦五郎	矢（疵）1	
×神吉	鉄炮（疵）2	
同討死者		
×仁田助一		
×昏屋又二郎		
×彌二郎		
○山縣九左衛門尉内（の）手負		山縣九左衛門…4の山縣九左衛門組（御手廻組）の組頭、御手廻衆、700石（分限帳 a）
×栗栖吉右衛門尉	やり（疵）1	
○吉田宗右衛門尉（の）手負		①吉田宗右衛門…Dの香川又左衛門の組、800石（分限帳 a） ②吉田宗右衛門…御手廻衆、800石（分限帳 a） この2人が同一人物とすると、2箇所を兼任する理由は不明。なお、800石という石高は一致する。

×大口与一郎	やり (疵) 1	
×有田彦右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
×三介	やり (疵) 1	
同討死者		
×森田彌三		
×彌左衛門尉		
○今田安右内 (の) 手負		今田安右 = 今田安右衛門 今田安右衛門…御手廻衆、500石 (分限帳 a)
×坂手少七	鉄炮 (疵) 1	
○朝枝彦七内 (の) 手負		朝枝彦七 = 朝枝彦七郎 朝枝彦七郎…Cの吉川勘左衛門の組、250石 (分限帳 a)
×田中徳右衛門尉	やり (疵) 1	
○境忠六内 (の) 手負		境忠六…御手廻衆、200石 (分限帳 a)
×須藤三蔵	鉄炮 (疵) 1	
○高橋孫作内 (の) 手負		①高橋孫作…Bの今田隼人の組、200石 (分限帳 a) ②高橋孫作…御手廻衆、200石 (分限帳 a) この 2 人が同一人物とすると、2 箇所を兼任する理由は不明。なお、200石という石高は一致する。
×廣瀬宗兵衛	(注1)	
○岡田五郎右衛門尉内 (の) 手負	討死 〃〃	岡田五郎右衛門…9の岡田五郎右衛門組 (御手廻組) の組頭、御手廻衆、300石 (分限帳 a) 分限帳 a の 3 箇所の岡田五郎右衛門の記載のうち、1 箇所は岡田五郎左衛門としている。
×林三右衛門尉		
○森脇志摩守内 (の) 手負		森脇志摩 (志磨) …6の森脇志摩 (志磨) 組 (御手廻組) の組頭、石高記載なし (分限帳 a)
×富田源兵衛	鉄炮 (疵) (注2)	
○石川源左衛門尉内 (の) 討死	■■■■■■■■■■ 〃〃〃〃〃〃〃〃	石川源左衛門…御手廻衆、200石 (分限帳 a)
×孫右衛門尉		
○素庵内 (の) 討死		素庵 (素菴) …医師・御伽衆、40石 (分限帳 a)
×彌右衛門尉		
○二宮兵介内 (の) 手負		二宮兵介…3の二宮兵介組 (御手廻組) の組頭、御手廻衆、400石 (分限帳 a)
○喜右衛門尉	やり (疵) 1	御小人衆、10石 (分限帳 a)
同討死者		
新右衛門尉		
○石川与兵衛内 (の) 手負		石川与兵衛…6の森脇志摩 (志磨) の組、100石 (分限帳 a)
×彌六	鉄炮 (疵) 1	
×久右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
△奈佐久介内 (の) 者 (の) 手負		条佐久介…御手廻衆、200石 (分限帳 a)
×三介	やり (疵) 1	
×四郎右衛門尉	矢 (疵) 1	
×三吉	鉄炮 (疵) 1	
△山縣清右衛門尉内 (の) 者 (の) 手負		山縣清左衛門…御手廻衆、400石 (分限帳 a)
×鈴木半右衛門尉	鉄炮 (疵) 1	
×山崎太郎右衛門	やり (疵) 1	

○二宮六右衛門尉内（の）手負		二宮六右衛門…御手廻衆、200石（分限帳 a） 津城討死の1人（分限帳 b）
×三四郎	鉄炮（疵） 1	
×野上市兵衛（内の）手負		
×本常彌三郎	矢（疵） 1	
×森口作内内（の）手負		
×新九郎	やり（疵） 1	
×桂五郎兵衛内（の）手負		
×与兵衛	やり（疵） 1	
以上 手負 ⁽⁷⁷⁾ 66人（65人カ） 討死 ⁽⁷⁷⁾ 21人（22人カ） （総合計）手負 ⁽⁷⁷⁾ 227人（226人カ） 討死75人カ 惣合 ⁽⁷⁷⁾ 302人（301人カ）		
（以下、〔吉川〕広家〔の〕自筆） 右に書き付け申し上げた通り、一人も偽りが無い。もし、偽りにおいては、愛岩 ⁽⁷⁷⁾ （宕）山、巖嶋大明神、大社大明神、摩利支尊天、八幡大菩薩、天満大自在天神の御爵を罷り蒙るべきものなり。 吉（川）藏（人） 廣家（花押） 8月26日		

【凡例】

分限帳 a …岩国徴古館所蔵『雲州御時代御家人帳』（資料番号0502000094）

分限帳 b …岩国徴古館所蔵『御家人帳』（資料番号1118000079）

○…分限帳 a、或いは、分限帳 b に名前の記載があるもの

×…分限帳 a、或いは、分限帳 b に名前の記載がないもの

△…分限帳 a、或いは、分限帳 b に近似する名前の記載があるもの

※史料中の文については、適宜、筆者（白峰）が現代語訳をおこなった。

※表2における「分限帳の記載」の項目は、表2の作成にあたり補足した箇所である。表2における「名前」の項目の名前との字の違いについては下線を引いた。

※分限帳 b は津城討死の衆の記載についてのみ対象にした。ただし、その記載箇所以外でも、名前を分限帳 a と比較して表2において提示したケースもある。

※『伊勢国津城合戦手負討死注文』（『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書）では、①「鉄放」と「鉄炮」を書き分けている、②「鉄放」、「鉄炮」、「矢」は漢字で記載されているが、「やり」はひらがなで記載されている、という点が指摘できるが、その理由については今後の検討課題である。

（注1）被疵の種類、及び、何箇所か、が記されていないのは記載漏れと思われる。

（注2）被疵が何箇所か、が記されていないのは記載漏れと思われる。

表 3

(岩国徴古館所蔵『雲州御時代御家人帳』)

★大組 A (宮庄太郎左衛門の組)

1,500石	1人	= 宮庄太郎左衛門
450石	1人	
300石	2人	
250石	2人	
200石	1人	
150石	2人	
100石	7人	
80石	1人	
60石	12人	
40石	8人	
30石	10人	
20石	3人	
15石	2人	
10石	18人	
合計	5,940石	

※合計石高は合計人数の石高を計算したものを示す (以下同じ)

★大組 B (今田隼人の組)

1,900石	1人	= 今田隼人
500石	1人	
450石	1人	
300石	1人	
200石	4人	
150石	2人	
100石	4人	
80石	2人	
60石	5人	
40石	2人	
30石	2人	
20石	2人	
10石	5人	
石高記載なし	7人	
合計	5,340石	39人

★大組C（吉川勘左衛門の組）

2,200石	1人
250石	2人
200石	1人
150石	4人
100石	4人
80石	1人
70石	3人
60石	6人
40石	11人
15石	8人
12石	5人
10石	12人
石高記載なし	2人
合計 5,290石	60人

= 吉川勘左衛門（吉川経実）

★大組D（香川又左衛門の組）

1,500石	2人
800石	1人
400石	1人
350石	1人
200石	1人
150石	1人
130石	2人
120石	1人
100石	5人
80石	2人
60石	7人
40石	6人
30石	6人
20石	8人
15石	8人
12石	7人
10石	11人
合計 7,254石	70人

= 香川又左衛門（香川春継）

★大組 E (桂左近の組)

	900石	1人	= 桂左近
	450石	1人	
	350石	1人	
	250石	1人	
	200石	2人	
	100石	4人	
	80石	1人	
	60石	11人	
	50石	3人	
	40石	5人	
	30石	12人	
	20石	9人	
	10石	25人	
合計	4,630石	76人	

★大組 F (粟屋彦右 (左) 衛門の組)

	1,100石	1人	= 粟屋彦右 (左) 衛門
	450石	1人	
	250石	1人	
	150石	2人	
	130石	1人	
	100石	2人	
	80石	4人	
	60石	14人	
	40石	2人	
	30石	8人	
	20石	11人	
	15石	7人	
	12石	5人	
	10石	22人	
合計	4,515石	81人	

大組 A ~ F の合計

大組 A	5,940石	70人
大組 B	5,340石	39人
大組 C	5,290石	60人
大組 D	7,254石	70人
大組 E	4,630石	76人
大組 F	4,515石	81人
合計	32,969石	396人

御手廻衆

800石	1人	
700石	2人	→ 4 山縣九左衛門（700石）、11今田平右衛門（700石）
600石	1人	
500石	4人	→ 1 松岡安右衛門（500石）、2 祖式九左（右）衛門（500石）、 5 有福助左衛門（500石）、10福富（留）与右衛門（500石）
400石	3人	→ 3 二宮兵介（400石）、15有間八郎右衛門（400石）
300石	3人	→ 9 岡田五郎右（左）衛門（300石）
250石	3人	→ 8 有福新兵衛（250石）、14佐々木九兵衛（250石）
200石	20人	→ 13井上彦（喜）兵衛（200石）
170石	1人	
150石	3人	
130石	2人	
120石	2人	
100石	7人	
80石	3人	
60石	23人	
50石	3人	
40石	8人	
30石	15人	
20石	23人	
石高記載なし	4人	
合計 16,470石	131人	→ 1～15の御手廻組頭はこの中に（御手廻衆に）含まれる。ただし、6、 7、12の御手廻組頭の名前はここにはない。

御小人衆

13石	5人	
10石	5人	
7石	11人	
小計 192石	21人	→ これ以外に御小人は155人いる
合計 ?石	176人	

★御手廻組1（松岡安右衛門組）※松岡安右衛門（今田安右衛門、今田^{ながよし}長佳）は500石

80石	1人
60石	1人
40石	1人
30石	1人
20石	10人
15石	5人
12石	4人
10石	21人
合計 743石	44人

★御手廻組 2 (祖式九左 (右) 衛門組) ※祖式九左 (右) 衛門 (祖式長好) は500石

100石	1人
40石	1人
30石	1人
20石	9人
15石	4人
12石	5人
10石	23人
合計	700石 44人

★御手廻組 3 (二宮兵介組) ※二宮兵介 (二宮長実) は400石

60石	1人
40石	2人
20石	8人
15石	1人
12石	4人
10石	39人
合計	753石 55人

★御手廻組 4 (山縣九左衛門組) ※山縣九左衛門 (山県春住) は700石

150石	1人
40石	3人
30石	2人
20石	11人
15石	3人
10石	13人
合計	725石 33人

御手廻組 5 (有福助左衛門組) ※有福助左衛門は500石

60石	1人
20石	14人
15石	4人
10石	29人
合計	690石 48人

★御手廻組 6 (森協志磨組) ※森協志磨は石高不明

100石	1人
80石	1人
40石	1人
30石	2人
20石	1人
15石	6人
12石	1人
10石	19人
石高記載なし	1人
合計	592石 33人

★御手廻組 7（米原肥前組）※米原肥前は石高不明

90石	1人
40石	1人
20石	3人
15石	7人
12石	14人
10石	25人
5石	1人
合計	718石 52人

★御手廻組 8（有福新兵衛組）※有福新兵衛は250石

40石	1人
20石	9人
15石	11人
12石	16人
10石	14人
石高記載なし	1人
合計	717石 52人

★御手廻組 9（岡田五郎右（左）衛門組）※岡田五郎右（左）衛門は300石

60石	1人
30石	1人
20石	5人
15石	3人
12石	5人
10石	30人
合計	595石 45人

御手廻組10（福富（留）与右衛門組）※福富（留）与右衛門は500石

60石	1人
40石	1人
30石	2人
20石	3人
15石	6人
12石	6人
10石	16人
石高記載なし	1人
合計	542石 36人

★御手廻組11（今田平右衛門組）※今田平右衛門は700石

40石	1人
20石	6人
15石	1人
12石	4人
10石	15人
合計	373石 27人

御手廻組12 (小坂越中組) ※小坂越中は石高不明

30石	2人
20石	2人
15石	3人
12石	1人
10石	13人
石高記載なし	37人
合計 287石	58人

御手廻組13 (井上彦 (喜) 兵衛組) ※井上彦 (喜) 兵衛は200石

60石	1人
20石	7人
15石	1人
12石	2人
10石	11人
石高不明	1人
合計 349石	23人

御手廻組14 (佐々木九兵衛組) ※佐々木九兵衛は250石

石高記載なし	24人
--------	-----

御手廻組15 (有間八郎右衛門組) ※有間八郎右衛門は400石

30石	1人
20石	4人
15石	3人
10石	1人
石高不明	4人
石高記載なし	2人
合計 165石	15人

御手廻組 1～15の合計

御手廻組 1	743石	44人
御手廻組 2	700石	44人
御手廻組 3	753石	55人
御手廻組 4	725石	33人
御手廻組 5	690石	48人
御手廻組 6	592石	33人
御手廻組 7	718石	52人
御手廻組 8	717石	52人
御手廻組 9	595石	45人
御手廻組10	542石	36人
御手廻組11	373石	27人
御手廻組12	287石	58人
御手廻組13	349石	23人
御手廻組14	石高記載なし	24人
御手廻組15	165石	15人
合計	7,949石	589人

御鉄炮之衆

800人

【凡例】

★…津城合戦に投入された吉川家の組を示す（表1、或いは、表2に組名の記載があるもの）

※表3は分限帳aをもとに作成した。ただし、「御鉄炮之衆」は分限帳bによった。

※分限帳aには弓衆に関する記載はない。

※分限帳a、分限帳bの凡例については、表1、表2の凡例を参照されたい。

表 4

(岩国徴古館所蔵『広家公御時代御家人帳』)

A	吉川伊賀守 (750石) など		37人 ^(注1) 、3135石 ^(注2)
B	吉川土佐守 (1100石) など		47人、3619石、ほかに90石
C	吉川和泉守 (900石) など		49人、4520石 5 斗
D	吉川内記 (1105石) など		43人、4637石 2 分 5 厘
E	吉川四郎兵衛 (750石) など		46人、4544石 ^(ママ) 斗
F	桂伯耆守 (450石) など		44人、3530石
G	粟屋帯刀 (450石) など		52人、3645石
H	津田助左衛門 (150石) など	彦次郎様組	25人、1840石 7 分 5 厘 ^(注4)
I	彦次郎様 (3000石) ^(注3) など	彦次郎様組	53人、4962石 ^(注4)
J	中井清兵衛 (30石) など	御弓衆・森脇源右衛門組	43人、772石 ^(注5)
K	中畑新右衛門 (30石) など	御弓衆・朝枝藤兵衛組	42人、779石 ^(注5)
L	森脇十右衛門 (30石) など	御弓衆・三浦伝右衛門組	48人、847石 5 分 ^(注5)
M	生田市右衛門 (35石) など	御弓衆・松井草左衛門組	49人、894石 5 分 ^(注5)
	鈴川五郎右衛門 (50石) など	御蔵方	34人、700石 ^(注6)
	粟屋孫兵衛 (25石) など	御台所方	24人、229石
	台屋源三郎 (25石) など	諸切工人方	19人、330石
	長谷川甚右衛門 (30石) など	御大工方	19人、328石
	野村藤左衛門 (40石) など	御船手方 ^(注7)	72人、924石
	又右衛門 (17石) など	御小入方 ^(注8)	65人、623石
	治部右衛門 (24石) など	御馬屋方 ^(注9)	20人、191石
	溝挟ノ次郎兵衛 (17石) など	御鉄炮方	118人、1002石
	川野弥介 (5石) など	御門番方	5人、29石 5 斗
	万徳院 (60石) など	寺社領	38口、387石 2 分
(以下略)			

※この分限帳の末尾に、村井宗兵衛は慶長19年10月5日に召し捕らえられたので、この分限帳(「人帳」)には載っていない、ということが記されている。よって、この分限帳の成立は慶長19年10月5日よりあとということになる。ちなみに、『雲州御時代御家人帳』には村井宗兵衛は80石として載っている。

(注1) 組などの合計人数を示す(以下同じ)。

(注2) 組などの合計石高を示す(以下同じ)。

(注3) 「彦次郎様」とは吉川広家の次男(三男とする説もある)・吉川彦次郎である。吉川彦次郎は慶長12年(1607)に生まれ、同17年(6歳)に吉見家を家督相続して吉見政春になり、その後、寛永14年(31歳)に毛利就頼になり大野毛利家を創始した。吉川彦次郎が3000石であった期間は、元和4年(1618)10月12日に兄の吉川広正から3000石を分与された時から、寛永3年(1626)に兄の吉川広正からさらに2000石を分与されるまでの期間になる(『一門六家 大野毛利氏と平生開作』、平生町教育委員会、1988年)。よって、岩国徴古館所蔵『広家公御時代御家人帳』の成立年代はその期間になる。ただし、吉川広家の没年は寛永2年であるので、『広家公御時代御家人帳』という名前を考慮すると、上記の期間において寛永3年は除外してもよいと思われる。なお、『岩国市史』通史編2(近世)(岩国市、2014年、323頁)では、この大組8組への編成替えの時期を元和6年としている。

(注4) この「二口」(=彦次郎様組)の合計について74人^(ママ)(78人カ)、6802石7分5厘と記されている。

(注5) 4組(=御弓衆)の合計について182人、3293石と記されている。

(注6) ほかに20石上地、1人と記されている。

(注7) 軀子は名字はなく、名前のみが記されている。

(注8) 小入は名字はなく、名前のみが記されている。

(注9) 名字はなく、名前のみが記されている。

表5

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に記された手負についての疵の分類

（『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書）

鉄炮疵	143例	54.4%
鎗疵	82例	31.2%
矢疵	37例	14.1%
刀疵	1例	0.4%
合計	263例	100.1%

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」では「やり疵」として、ひらがなで表記されているが、表5では鎗疵と表記した。

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」において、「鉄放疵」と記載された13例については、「鉄炮疵」に含めてカウントした。

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」において、「手負」と記されていて疵の種類、及び、疵が何箇所なのか、ということが記載されていない（つまり、記載が漏れている）1例についてはカウントしなかった。

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」において、鉄炮疵と記されているが何箇所の疵なのか記載されていない（つまり、記載が漏れている）2例については、それぞれ1箇所としてカウントした。

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」において、1人で2ヶ所の同じ種類の疵を受けた場合は、それぞれ1つずつカウントした。

※表5における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

表 6

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に記された、1 人が複数の疵を受けたケースを
まとめたもの

(『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書)

名 前	鉄炮疵	鎚 疵	矢 疵	刀 疵	合 計
今田隼人 (注1)	1ヶ所	1ヶ所			2ヶ所
吉川勘左衛門尉 (注2)	2ヶ所	2ヶ所	1ヶ所		5ヶ所
今田安右衛門尉 (注3)	1ヶ所	1ヶ所			2ヶ所
森脇彦左衛門尉 (注4)	1ヶ所	2ヶ所			3ヶ所
安達治兵衛 (注5)		1ヶ所	2ヶ所		3ヶ所
黒政五右衛門尉 (注6)		1ヶ所	1ヶ所		2ヶ所
松井出左衛門尉 (注7)		2ヶ所	1ヶ所		3ヶ所
中井平三 (注8)		1ヶ所	1ヶ所		2ヶ所
森口作内 (注9)	1ヶ所	1ヶ所			2ヶ所
▼ 佐々間理介 (注10)		1ヶ所	1ヶ所		2ヶ所
▼ 恩田又右衛門尉 (注11)		1ヶ所	2ヶ所		3ヶ所
江戸吉右衛門尉 (注12)		1ヶ所	2ヶ所		3ヶ所
合計	6ヶ所	15ヶ所	11ヶ所		32ヶ所

【凡例】

無印…吉川家家臣を示す

▼ …吉川家の又家来（陪臣）を示す

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」では「やり疵」として、ひらがなで表記されているが、表6では鎚疵と表記した。

※分限帳 a、分限帳 b の凡例については、表1、表2の凡例を参照されたい。

(注1) Bの今田隼人の組の大組頭、1500石、或いは、1900石（分限帳 a）。

(注2) Cの吉川勘左衛門の組の大組頭、2200石（分限帳 a）。

(注3) 御手廻衆、500石（分限帳 a）。

(注4) Dの香川又左衛門の組、20石（分限帳 a）。津城討死の1人（分限帳 b）。森脇彦左衛門尉は、分限帳 b では津城討死の1人として記されているが、表1（「伊勢国津城合戦手負討死注文」）では討死した者の中に名前はない。

(注5) 分限帳 a に記載なし。

(注6) Eの桂左近の組、60石（分限帳 a）。

(注7) 松井出右衛門（分限帳 a）。御手廻衆、40石（分限帳 a）。

(注8) 中井平蔵（分限帳 a）。2の祖式九左衛門の組、20石（分限帳 a）。

(注9) 森脇作内（分限帳 a）。御手廻衆、100石（分限帳 a）。

(注10) 佐々間利^(ツ)（分限帳 a）。佐々間利介（分限帳 b）。9の岡田五郎右衛門の組、12石（分限帳 a）。

(注11) 香川又左又左衛門の内。分限帳 a に記載なし。

(注12) 香川又左又左衛門の内。分限帳 a に記載なし。

表7

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に記された手負・討死の人数の合計と総合計

（『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書）

■吉川家家臣			
手負	士分	145人	a
手負	中間	16人	b
小計		161人	a + b
■吉川家家臣			
討死	士分	$\overset{(\overline{\text{マ}})}{52}$ 人（51人カ）	c
討死	中間	2人	d
小計		$\overset{(\overline{\text{マ}})}{54}$ 人（53人カ）	c + d
■又家来（陪臣）			
手負		$\overset{(\overline{\text{マ}})}{66}$ 人（65人カ）	e
討死		$\overset{(\overline{\text{マ}})}{21}$ 人（22人カ）	f
■合計、総合計			
合計	手負	$\overset{(\overline{\text{マ}})}{227}$ 人（226人カ）	a + b + e
合計	討死	75人	c + d + f
総合計		$\overset{(\overline{\text{マ}})}{302}$ 人（301人カ）	a + b + c + d + e + f

《参考》この史料には記載はないが、以下の計算をおこなった。

吉川家家臣の合計	215人（71.2%） ^{（注1）}	a + b + c + d
吉川家の又家来 （陪臣）の合計	87人（28.8%） ^{（注1）}	e + f
総合計	302人（100.0%）	

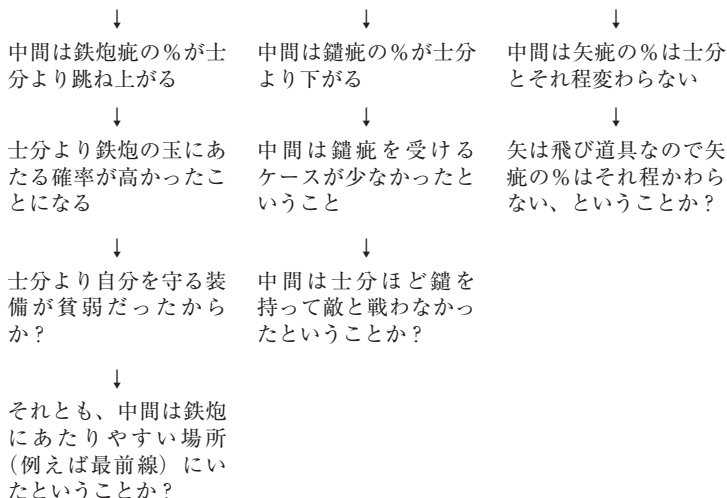
（注1）上表における吉川家家臣の合計を計算すると215人になる。上表における吉川家の又家来（陪臣）の合計を計算すると87人になる。この両者の人数比を%で計算すると、215人（71.2%）、87人（28.8%）になる。なお、吉川家家臣の討死は、史料では士分の名前が1人重複しているため、実際にカウントすると吉川家家臣の合計は214人になり、総合計は301人になるが、煩雑さを避けるため、史料に記された人数表記をもとに人数の合計、総合計と%を計算した。

表 8

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に記された手負について、士分と中間の区分により疵の種類を分類した表

(『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書)

	鉄炮疵	鎗 疵	矢 疵	合 計
士分	92例 (53.5%)	58例 (33.7%)	22例 (12.8%)	172例 (100.0%)
中間	13例 (76.5%)	2例 (11.8%)	2例 (11.8%)	17例 (100.1%)



※表 8 では吉川家家臣のみを対象とした。又家来(陪臣)は対象から除外した。

※表 8 における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

表9

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に記された手負と討死について、士分と中間の人数を比較した表

（『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書）

※吉川家家臣のみを対象とした。又家来（陪臣）は対象から除外した。

《手負》

士分	145人	90.1%	(注1)
中間	16人	9.9%	
合計	161人	100.0%	

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

《討死》

士分	52人	96.3%	(注2)
中間	2人	3.7%	(注3)
合計	54人	100.0%	

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

上表における士分と中間をそれぞれ合計すると以下ようになる。

士分	197人	91.6%
中間	18人	8.4%
合計	215人	100.0%

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

- (注1) 吉川家では家臣の場合、手負をした中間が9.9%であることは、中間はそれ程多くの人数の割合が戦闘に参加したわけではないということか？全体の人数の1割程度の人数である。この点は(注3)の%からもわかる。
- (注2) 士分の討死は、史料では名前が1人重複しているので、実際にカウントすると51人になるが、煩雑さを避けるため、史料に記された人数(52人)で計算した。
- (注3) 吉川家では家臣の場合、討死した中間が3.7%であることは、士分と比較して中間が死ぬ程(生死を分ける程)の戦闘の場になかったということか？或いは、中間は戦闘において、あくまで士分の補助的な役割だったということか？

表10

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に記された手負と討死について、士分と中間の人数を比較した表

(『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書)

※吉川家の又家来（陪臣）のみを対象とした。

《手負》

士分	37人	57.0%	(注1)
中間	28人	43.1%	
合計	65人	100.1%	

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

《討死》

士分	11人	50.0%	(注1)
中間	11人	50.0%	
合計	22人	100.0%	

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

上表における士分と中間をそれぞれ合計すると以下のようになる。

士分	48人	55.2%	(注2)
中間	39人	44.8%	(注2)
合計	87人	100.0%	

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

(注1) 吉川家では、又家来（陪臣）の場合、戦いに参加した中間の占める%が高い。

(注2) 吉川家では、又家来（陪臣）の場合、士分と中間の戦いへの参加率は大きなひらきがない。

つまり、吉川家では、又家来（陪臣）の場合、中間の占める%が高い。これは又家来（陪臣）ということ を考えると当然のことであろう。

表11

戦い（津城合戦）の際の中間には、以下のように、吉川家の家臣が引き連れてきた中間と、吉川家の又家来（陪臣）が引き連れてきた中間がいた。つまり、2種類の間中がいた。

《手負》 表9

士分	145人	90.1%
中間	16人	A 9.9%
合計	161人	100.0%

（注1）→吉川家の家臣が引き連れてきた中間

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

《手負》 表10

士分	37人	57.0%
中間	28人	B 43.1%
合計	65人	100.1%

（注1）→吉川家の又家来（陪臣）が引き連れてきた中間

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

《討死》 表9

士分	52人	96.3%
中間	2人	C 3.7%
合計	54人	100.0%

（注2）→吉川家の家臣が引き連れてきた中間

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

《討死》 表10

士分	11人	50.0%
中間	11人	D 50.0%
合計	22人	100.0%

（注2）→吉川家の又家来（陪臣）が引き連れてきた中間

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

（注1）この両者を比較すると、又家来（陪臣）が引き連れてきた中間の%の方が4.4倍程多い。

（注2）この両者を比較すると、又家来（陪臣）が引き連れてきた中間の%の方が13.5倍程多い。

※吉川家の又家来（陪臣）が引き連れてきた中間（BとD）の%の高さ（表10）は注目される。

※吉川家の家臣が引き連れてきた中間（AとC）の%の低さ（表9）を見ると、吉川家の家臣は戦い（津城合戦）にあまり中間を引き連れてきていないことになる。

※吉川家の又家来（陪臣）が引き連れてきた中間は、吉川家の又家来（陪臣）の個別の事例でも、今田内、吉勘左内、桂右近内、香川又左内は中間の%（人数）が高い（表12参照）。

表12

「伊勢国津城合戦手負討死注文」に記された吉川家の又家来（陪臣）の士分と中間の人数比

(『吉川家文書之一』〈大日本古文書〉、728号文書)

(1) 今田内 (の) 手負

士分	8 人	57.1%
中間	6 人	42.9%

(2) 今田内 (の) 討死

士分	5 人	62.5%
中間	3 人	37.5%

(3) 吉勘左内 (の) 手負

士分	6 人	85.7%
中間	1 人	14.3%

(4) 吉勘左内 (の) 討死

士分	2 人	66.7%
中間	1 人	33.3%

(5) 桂右近内 (の) 手負

士分	3 人	37.5%
中間	5 人	62.5%

(6) 桂右近内 (の) 討死

士分	0 人	0.0%
中間	2 人	100.0%

(7) 香川又左内 (の) 手負

士分	9 人	60.0%
中間	6 人	40.0%

(8) 香川又左内 (の) 討死

士分	2 人	66.7%
中間	1 人	33.3%

(9) 山縣九左衛門尉内 (の) 手負

士分	1 人	100.0%
中間	0 人	0.0%

(10) 吉田宗右衛門尉内 (の) 手負

士分	2 人	66.7%
中間	1 人	33.3%

(11) 吉田宗右衛門尉内 (の) 討死

士分	1 人	50.0%
中間	1 人	50.0%

(12) 今田安右内 (の) 手負

士分	1 人	100.0%
中間	0 人	0.0%

(13) 朝枝彦七内 (の) 手負

士分	1 人	100.0%
中間	0 人	0.0%

(14) 境忠六内 (の) 手負

士分	1 人	100.0%
中間	0 人	0.0%

(15) 高橋孫作内 (の) 手負

士分	1 人	100.0%
中間	0 人	0.0%

(16) 岡田五郎右衛門尉内（の）討死

士分	1人	100.0%
中間	0人	0.0%

(17) 森脇志摩守内（の）手負

士分	1人	100.0%
中間	0人	0.0%

(18) 石川源左衛門尉内（の）討死

士分	0人	0.0%
中間	1人	100.0%

(19) 素庵内（の）討死

士分	0人	0.0%
中間	1人	100.0%

(20) 二宮兵介内（の）手負

士分	0人	0.0%
中間	1人	100.0%

(21) 二宮兵介内（の）討死

士分	0人	0.0%
中間	1人	100.0%

(22) 石川与兵衛内（の）手負

士分	0人	0.0%
中間	2人	100.0%

(23) 奈佐久介内（の）者（の）手負

士分	0人	0.0%
中間	3人	100.0%

(24) 山縣清右衛門尉内（の）者（の）手負

士分	2人	100.0%
中間	0人	0.0%

(25) 二宮六右衛門尉内（の）手負

士分	0人	0.0%
中間	1人	100.0%

(26) 野上市兵衛（内）の手負

士分	1人	100.0%
中間	0人	0.0%

(27) 森口作内内（の）手負

士分	0人	0.0%
中間	1人	100.0%

(28) 桂五郎兵衛内（の）手負

士分	0人	0.0%
中間	1人	100.0%

合計

士分	48人	55.2%
中間	39人	44.8%

総合計

	87人	100.0%
--	-----	--------

※上表における%の計算については、小数点第二位を四捨五入した。

※「伊勢国津城合戦手負討死注文」において、吉川家家臣では名字がなく名前だけの者について「中間」と記されている。「伊勢国津城合戦手負討死注文」において、吉川家の又家来（陪臣）では名字がなく名前だけの者について「中間」とは記されていないが、吉川家家臣の場合と同様に「中間」と見なすこととする。